

記憶の中の「雪」

——民俗知識と個人の主観が混在するライフ・ヒストリーから——

有馬 絵美子

ARIMA Emiko

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 毎年降積雪に見舞われる地域に暮らす人々にとって、「雪」とはどのような存在なのだろうか。本稿は、2007～2009年長野県飯山市における、多雪環境下での暮らしについての聞き書きをもとに、二人の住民による口述資料を非文字資料として、人生の中で「雪」がどのような意味合いを持つのか考察することを目的とする。

一年を単位に循環する時間軸の視点から生活暦を捉えると、毎年巡り来る降積雪期に対して住民は、一年を俯瞰して年間の作業内容を配分し、生産性の最大化を図っていた（有馬 2023a）。それに対して人生などの直進する時間軸では、「雪」はどのような存在であり、どのようなエピソードが記憶に残っているのだろうか。

本稿では、日本の中でも特に降積雪量が多く、特別豪雪地帯に指定されている飯山市において、長年「雪」に対応してきた二人の住民の聞き書きから、記憶の中の「雪」にまつわるエピソードをライフ・ヒストリー（生活個人史）として提示する。これまでの研究でライフ・ヒストリー法は、集落の複数の住民から聞き合わせて、全体を把握することに力点が置かれてきたが、あえて個人の主観にも注目して人生を捉えることを試みる。その際に、中野紀和（2003）が指摘したように、話者に対して、伝承母体の代表性を体現している面と、個人の意志をもって行動している主観的な面があることを分けて考察した。集落の伝承母体の体現者として「雪」に対応してきたエピソードからは、降積雪量の多い地域で生き抜くための民俗知識の具体的な様相を記録した。また「雪」に対する主観の変遷からは、人生の中でも時々の状況や生業に応じて「雪」への認識が変化していることが明らかになった。

【キーワード】 長野県飯山市、特別豪雪地帯、直進する時間、自然観、冬季生業

Snow in Memories

—— From life histories intertwined with folklore knowledge and subjective views ——

Abstract : What does snow mean to people living in areas where snow accumulates every year? This paper aims to study the significance snow has to people's lives based not on written materials but on notes taken during interviews with two residents in Iiyama City, Nagano Prefecture, between 2007 and 2009. They talked about life in an environment with heavy snow.

Reflecting on the calendar of people's lives using the axis of time flowing cyclically by the year, the residents tried to maximize their productivity by organizing tasks with the entire year in mind. They did so to prepare for the snowy season that never fails to arrive (Arima 2023a). In contrast, another time axis proceeds in a linear way, and not in a cyclical pattern, such as one's

life. From this perspective, how do people view snow? And what kind of episodes do their memories retain?

This paper presents anecdotal stories about snow as remembered by people in the format of life history, or individual biography, based on the narratives of two Iiyama residents who lived with snow for a long time. Located in an extremely snowy region in Japan, Iiyama is designated as a special heavy-snowfall area. In previous studies, the life history method would focus on grasping the entirety by compiling stories from numerous villagers. This paper, however, takes on the challenge of understanding life by looking at the subjective views of individuals as well. In doing so, the author separately considered the two aspects observed in the storytellers: the individual may represent regional traditions and at the same time adopt a subjective stance, acting according to their will, as pointed out by Nakano Kiwa (2003). From episodes of coping with snow as persons who embody the village lore, the author recorded specific aspects of folklore knowledge of survival in a heavy-snowfall area. In addition, from changing subjective views on snow, this paper reveals that people's perceptions of snow vary during their lives, depending on circumstances and on how they make a living.

Keywords : Iiyama City, Nagano Prefecture; special heavy-snowfall area; time that proceeds in a linear way; views of nature; ways to make a living in winter

はじめに

毎年降積雪⁽¹⁾に見舞われる地域に暮らす人々にとって「雪」とは、どのような存在なのだろうか。筆者は秋山郷での年中行事や生活暦から、毎年巡り来る降積雪期に対して住民が、家屋を保護し、食糧や薪を貯蔵するなどの工夫を凝らし、また非積雪期に生産物の最大化を図るために一年を俯瞰して冬期の作業を配分するなど、「雪」と折り合いをつけて住み継いでいることを考察した。このような一年を単位に循環する時間軸の一方で、人生という直進する時間軸においては、「雪」にどのように対処し、何が記憶に残っているのだろうか。

直進する時間とは、例えば「二〇〇七年や個人の経験する六〇歳という年齢は二度と経験することはない」(渡邊 2008: 8) など、戻ることができず、繰り返すこともないという時間認識の視点である。このような視点からは、人生儀礼やライフ・ヒストリーなど、人生の中で節目の通過に伴って執り行われる儀礼の意味や意義を明らかにし、また、個人史から生活の変遷を追うなどの研究が蓄積されてきた。しかし、これまでの研究では、集落の複数の住民から聞き合わせて、全体を把握することに力点が置かれてきたが、あえて個人の主観に注目して人生を捉えることを試みたい。本稿では降積雪量の多い長野県飯山市において、二人の住民によって語られた口述資料を非文字資料とし、記憶の中の「雪」にまつわるエピソードをライフ・ヒストリー（生活個人史）として提示する。そして、人生の中で「雪」がどのような意味合いを持つのかを考察することを目的とする。

I 問題の所在

日本の国土のうち降積雪量の多い地域は、豪雪地帯対策特別措置法により「雪害の防除その他積雪

により劣っている産業等の基礎条件の改善」が図られており、その面積は、国土の約 51% を占めている（国土交通省 2022）。近代化の文脈において「雪」は、例えば札幌市において、1961 年に日本で初めて除雪費用が予算計上された際、「衛生費の中の掃除費の一項目でゴミ処理と同じ扱い」（柏原 1993：68-70）であったように、害である、克服すべきものという考えが主流を占めてきた。『雪国大全』（2001）を著した佐藤国雄は、冬季の降積雪が足かせとなって太平洋側ほどの発展を見せていなかった日本海側が「裏日本」などと揶揄された状況に対し、雪国出身の代議士たち、特に松岡俊三と田中角栄の二人の活躍に注目し、数々の法案成立に奔走して雪国の生活を向上しようとてきた様子を克明に綴った。

また、保健衛生運動の中でも「安い労働力の供給源でしかなかった」沢内村（現：岩手県和賀郡西和賀町）において、「健康的な住み良いわれらの村、人間としての生活のできる村」へ改善しようと、村長・住民共に保健衛生運動に奮闘した様子が『自分たちで生命を守った村』（菊池 1968）として著された。冬季は死亡診断書を貰うためだけに、死人を箱ゾリに乗せて雪の中を片道 6 時間もかけて 20 km 離れた医師のもとへ歩いた。そのような経験から村に診療所を作るべく働いた人々は、医師には死亡を検案してもらうのではなく、老人や乳児を死から守り、健康を見守る医療を実現したいと奔走した、「人間復帰の村ぐるみの闘い」という近代化の一面を後世に伝えている。

越後妻有地域（新潟県十日町市・津南町）では、男性が冬季出稼ぎに出ないと生活が困窮する状況を訴える婦人運動が起こった。そして刊行された『豪雪と過疎と』（妻有の婦人教育を考える集団編 1976）には、「男たちは根こそぎ、千円札、一万円札に駆りたてられるかのように都会に出されていき、残された婦人たちが「豪雪と過疎の山里で、激しい労働ときびしい生活、そして寂しい」日々を送った様子が書き綴られた。積雪のために農業ができないなど生産活動に制約がある雪国では、現金を稼ぐために男性たちが出稼ぎに出る必要があり、残された婦人たちは危険な除雪作業に追われつつ子や親との生活を守り、さらに機^{はた}を織って家計の足しにした。家族に病人が出ても無医村ではどうすることもできない状況や、共有地の除雪など嫁ぎ先での慣れない村普請、子どもの教育に身も心もすり減る、その心労は端的に「長い冬」という言葉で表現された。

このように雪国での生活実態については、高度経済成長期の生活変化に伴い、政治活動や保健衛生運動、婦人運動など住民自身が訴え、また書籍として出版されてきた。その一方で、声をあげてこなかった市井の人々は、時代が移り変わる中で、「雪」に対して何を思い、どのように感じていたのだろうか。本稿では民俗学の立場から、住民により「訴えられたこと」ではなく、住民により「語られたこと」に注目するために、聞き書きの資料を用いて生活にまつわる個人史を編集してライフ・ヒストリーとして提示し、「雪」に対する認識について考察していく。

II 研究の視点

民俗学や社会学などでの生活史／ライフ・ヒストリー研究の変遷について、桜井厚は『現代民俗学研究』へ寄せた論文で詳しく考察した。「生活史／ライフ・ヒストリーは、オーラリティ／口述だけでなく自伝、日記、手紙などの個人的記録を利用する質的研究法」として社会学などで用いられていたが、個人のオーラリティー⁽²⁾に基礎をおくライフ・ヒストリー研究は、中野卓による『口述の生活史』

(1977) が「リバイバルのさきがけとな」り、「オーラリティ／口述という語りに基づく生活史である点でライフ・ヒストリー研究へ向かう新しい可能性を切り拓いた」(桜井 2013: 1-2) と位置づけている。そのうえで、口述資料をもとにすること自体は聞き書きの伝統があったが、社会学者・中野卓の対象としたのが個人であるのに対し、民俗学では「集合的な語りに焦点があてられ」てきたと分析している。

民俗学で個人のライフ・ヒストリーを取り入れた研究成果として、「民俗学におけるライフ・ヒストリーの課題と意義」を著した中野紀和は、「慣習や規範を反映した存在としての個人」の営為に注目することで、「それらを基盤として、さらにあらたな実践が生み出されていく過程」を示すことを試みている(中野 2003: 3)。中野がライフ・ヒストリーを提示した「行為者としての個人」は、「規範や慣習から完全に解放された個人ではなく」、伝承母体の代表者としての側面を持ちつつも、意志をもって行動する個人と捉えることができるとして、「対象そのものへの再考を促」している。また、先述の桜井は、「オーラリティに基礎をおくライフ・ストーリーは、ナラティブが内包する物語と行為としての語りという二重の意味をもつ。語られる内容だけでなく語り方にも注意を向け」る必要がある(桜井 2013: 12) とし、これまで民俗学において検討されることの少なかった「個々の誰がどのような背景で語ったのか、といったその時々語り手の社会的文化的コンテクストへの配慮」(桜井 2013: 2) にまで踏み込んで考察する必要性に言及している。

岩本通弥は『ナラティブと主観性の復権——民俗学からの問い』を上梓し、ドイツのナラティブ研究を紹介し、ドイツの民俗学者アルブレヒト・レーマンの来日講演やシンポジウムでの討論をもとにした日本側研究者による議論や応答を集成した。岩本は、アルブレヒト・レーマンの業績について、『『日常』文化の把握をめざす新たな『語り』研究』により、ライフ・ヒストリーを超えて「日常の語り」にまで研究対象を広げ、「意識分析」へと研究の質を上げた(岩本 2020: 3) と評した。そして、これまで切り捨てられてきた「感情や気分、雰囲気や感覚といった心理の混じったナラティブ」の見直しを提唱した(岩本 2020: 2)。岩本は日本での聞き書きについて、和歌森太郎による『新版日本民俗学』を引用し、「なるべくその部落の一般性を代表するような古老に聞く必要がある。しかもそれは一人に限らず、二人、三人の人に、たとえ同時に集めて行かなくとも、いずれはそうしたいろいろな人から聞き合わせて行くことが必要である」(和歌森 1970: 33) と、「一人称複数の民俗知識のみが重宝がられてきた」ことを指摘したうえで、「聞き書きによって得られた語りは、個人的で主観的な単数だ」と認識の転換を提案した(岩本 2020: 18-19)。確かに、聞き書きの中で個別性の強いライフ・ヒストリー(個人生活史)の調査でも、『民俗調査ハンドブック』には、「個別事例収集の一種」として調査方法が明示され、「話者側の話の道すじに重点をお」き、「生活体験全体をとらえることをめざし」、そのことが描き出すものは、「その村で繰り返されてきた伝統的な生活パターンの実例という側面」と「ある時代背景の元での伝統的形態の変化の過程を示す側面」(中込 1987: 40) とがある、と記載されているなど、どちらも調査対象地域での一般的な事象を検討するために活用されてきた。

このように、民俗学では地域での一般的な事象を聞き取るために用いられることの多かった聞き書きの手法は、中野紀和の指摘するように、伝承母体の代表性を体現している面と、個人の意志をもって行動している主観的な面があると、個人への認識を改めることで、口述資料を活用する幅が広げら

れると考える。また、桜井の指摘したように対象者の社会的背景にも注意を払うことや、岩本の提示したように心理面にも注目することで、ライフ・ヒストリー法をより活かすことができるのではないだろうか。

本稿では、2007～2009年に長野県飯山市での調査において、特に長年飯山市に暮らして「雪」に対処してきた経験を有する二人からの聞き書きを、生活個人史／ライフ・ヒストリーとして資料化し、「雪」に対する認識を考察する。調査地の飯山市は、新潟県と県境を接する長野県の最北端に位置し、1962年に制定された豪雪地帯特別措置法により、国の特別豪雪地帯に指定されている地域である。飯山市の農業は、積雪のために裏作のできない水田単作農業である（飯山市誌編纂専門委員会編1995：365）。そのため、冬季の屋内製造業として畳表や内山和紙、飯山仏壇などの製造業が発達し、またスキー場の開発、豊富な水量を活かした工業団地の誘致が盛んである。飯山市の山間部の農村では、冬季の降積雪期間に備えて、食糧を蓄えたり、雪を消すための「タネ」と呼ばれる池を整備したりするなどの対応が見られる。雪を消す際に用いられる池「タネ」に関しては別稿（有馬2023b）に詳しく、「タネ」と併用して除雪に用いられる「冬ダネ」は、秋の農作業が一段落すると家の周りに掘って作られ、春の農作業始めには埋め戻される池である。「タネ」に加えて「冬ダネ」も整備して降積雪に対処している様子について、昭和10（1935）年生まれで当時73歳のKさん（男性）⁽³⁾と、昭和元（1926）年生まれで当時82歳のYさん（女性）⁽⁴⁾から聞き書きを行った。二人が「タネ」を活用して雪国で暮らす様子については別稿（有馬2009）に記しているが、その中では、口述資料について十分に検討できていなかったため、今回は改めて二人のライフ・ヒストリーから、生活世界における自然要素「雪」に注目し、人生の中で「雪」がどのような意味合いを持つのかを考察していく。

Ⅲ 生業の変遷と「雪」認識の変化

昭和10年生まれのKさん（当時73歳）は、長野県飯山市の山間の集落で、先代から受け継いだ土地で農業を営み、家庭を築いてきた。冬季の生業について、学生の頃は薬^{ワラ}製品の製造に携わり、その後8度、静岡県へ出稼ぎを経験している。近くにスキー場が開設したことを機に、昭和38（1963）年からスキー場へ勤め始め、45年勤めたスキー場を辞めた現在は、降雪期には自宅の除雪をし、非降雪期には農作業に専念している。

Kさんが初めて、自分の住む地域が飯山市の中でも特に雪が多い地域であることを認識したのは、中学3年生の年の新年会であるという。一晩で1mも雪が積もり、学校へ出かけることができなかったためである。中学校のある場所は、Kさん宅よりも標高が低く、積雪量もKさん宅の地域よりも3分の2ほどであるという。この頃は、父を亡くした時期と重なって、食べていくことに懸命な時期であり、この出来事に対して特に感情的な回想はなく、ただ、新年会へ参加できた人がある一方で、自分は積雪量の多い地域に自宅があったために参加できなかったのが記憶に残っていたのだという。この地域では山の方へ行くほど積雪量が多い様子を「一里一尺」⁽⁵⁾と表現しているように、自宅は学校付近よりも標高が高く、積雪量が多い地域だと認識する一助になったという。子どもの頃の労働⁽⁶⁾について、Kさんは以下のように振り返っている。

冬の間は、近所の4〜7人、誰かの家に集まって（薬製品を製造した）。小学生の頃は大人が（薬製品を）作ってる間、子守任されたけど、あやし方わからなくて……泣き止まないと一緒に泣いたりして……ひどい時はぶん殴られて、蔵入れられて……。中学生の頃には薬叩きとか、コシ縄なうとか、段々覚えていって、冬なのにシャツ一枚になって、汗かきながら薬叩いて（親たちが蓑や筵などの製品に仕立てていった）。手の油っけ、薬にみんな取られるから、手から血出しながら、絆創膏貼って……。

薬仕事に励んで現金収入を得ていた頃の話は、多くは語られなかった。薬製品に代わる工業製品が出回り始めてからは、蓑などが次第に売れなくなったため、昭和28（1953）年からは農協の斡旋で出稼ぎに出るようになった。「現金を取ってくるため」⁽⁷⁾に、静岡県へ「みかん切り」に行った。自宅に残る母が、まだ乳児の弟の世話をしながら、日々の生活に苦労しないようにと、できる限りの冬支度を済ませてから出発するようにしたという。この頃を振り返ると、「1年目は辛かった。家族を残して……」と言葉を詰まらせた。「あの頃は電話なかったし、家の心配しても仕方なかった」と、自身も飯山市から遠く離れたところへ出かける経験は初めてであり、父を亡くして現金を稼がなければならぬ重圧と、父のいない中で母と弟だけで暮らせるのか、と心配が尽きなかったという。

2年目以降の出稼ぎの話では、表情が一転した。「みかん切り」作業の勝手がわかってきたこともあり、「次の年からは個人的に頼まれるようになって」と、出稼ぎ先のみかん農家から信頼を得て、初年度ほどの心細さはなかったという。アルバムには、作業仲間8人とみかん畑の傾斜地で、二段重ねのワッパ弁当を食べている写真があった。1日4度の食事と重労働で体力が付き、「同年代の人と、休みの日には街に、自転車で映画観に行ったり、コンサートあるって、飛んで行ったり」と楽しむ余裕も垣間見られた。

「雪が苦ではなくなった」のは、振り返ってみると、近くにスキー場がオープンしたことがきっかけだったという。「家族が離れ離れにならなくて良いから」と、昭和35（1960）年に開業したスキー場⁽⁸⁾に、昭和38年から働き始めた。スキー場での持ち場は様々だったが、例えばリフトのイスが来るたびに、イスに積もった雪を払う作業などを担当した。このことについて、食堂に勤務していた妻からは「リフトの衆^{しよ}はいいよねえ、食堂は行ったらずっと立ちっぱなしだし、食中毒に気を付けないといけないし、大変だったよ」などと憎まれ口をたたかれながらも、スキー場の思い出話の際は、夫婦共に一貫して明るく話された。

あの頃は……出られる日は毎日。30分くらいかけて、汗かきながら歩いて（通った）。帰ってきたら夜鍋して屋根の雪掘った⁽⁹⁾。ナイターの明かりで明るいから（スキー場が開業してからは、夜の除雪作業でも）やりやすかった。景気の良い時にはリフト13本で15億⁽¹⁰⁾。わずか100日ほどの営業で慰安旅行……沖縄とか。九州も2回行ったな。勤続5年で家具、10年でダンスとかテーブルもらえて……いい時代だった。

スキー場への勤務は、吹雪の中を30分歩いて出勤したなどの苦勞話でも、薬仕事をしてきた苦しい時の語りからは一転して晴れやかな表情で振り返っていた。スキー場の開設は、白坂藩や呉羽正昭

の一連の研究により、経済的な影響に加え、民宿の普及による村落構造の変化も指摘（呉羽 1999）されるなど、スキープームの到来で、娯楽関連で稼げるようになった社会変化の大きさがうかがえる。また、飯山市史にも「冬は出稼ぎに頼っていた多くの人々は市内外にできたスキー場で働くこともできるようになり、今は「雪」に対する市民の考えも変わってきている」（飯山市誌編纂専門委員会編 1991：130）と、「雪」への認識が変化した様子が読み取れる。Kさんのこれらのスキー場に関する語りからは、冬季にも安定して収入が得られるようになったことで、出稼ぎで家族が離れる状況から解放され、「雪」に対しては、悲観的な想いから、恩恵をもたらす恵みへと認識が変化したと考えられる。

IV 積雪期の教訓

昭和元年生まれのYさんのエピソードからも、人生における「雪」の影響を検討する。筆者は旧正月の道祖神祭り調査の際、集落内で最も立派な消雪池「冬ダネ」を整備している方としてYさんの紹介を受けた。その集落は山間部に位置し、飯山市の中でも特に積雪量が多く、冬季は長く雪に閉ざされてきた地域である。現在では道路が開通し、降雪のたびに飯山市の除雪車による整備が行き届くようになったが、各家庭では冬季の暮らしに備えて、食糧や薪を保存し、家屋や樹木に雪囲いを施し、家の周りには消雪池「タネ」及び、冬季限定の「冬ダネ」を整備する暮らしが根付いていた。現在では昔ほどではないが、家庭ごとに越冬の備えをしている。しかし、初めてYさんにお会いした際、冬の備えで最も大切なことは何か伺うと、「火の用心が一番。家から出られるのが一番」とYさんは即答した。後日改めて、どうして火事に備えることが大切なのかを伺うと、昭和51（1976）年のA宅のエピソードが語られた。

屋根の上2m（雪が積もっていた）。列車も1週間止まった。（Yさん宅の）流しの屋根が落ちて（台所の屋根が、母屋の屋根雪落下により破損）。流しのところ戸開けたら空見えた。娘と、とーちゃん（夫）とで落ちた屋根上げてたら「火事だー」って（聞こえて）。みんなでポンプ押ししたり引いたり。村の衆、みんな来てくれたけど。タネ（消雪池は）雪で埋まって水取れない。雪上車さえ来られない。

（Aさんは）台所で豆カラ焚いてロウ溶かして、ダンプに塗って（雪の滑りが良くなるように、除雪用大型スコップの表面にロウを塗って）。村の年寄りの衆（家）が雪で潰れそうだった、みんなで雪消し行っていた。（その頃A宅では、豆カラを焚いた火が）ツル細工の細かいカス……風呂焚きに入れようとしてたやつ（に引火した）。パチパチ、ネズミかと思ったら、電気の線、ちょうもん（玄関部分の中門造）伝って上（茅葺屋根）まで上がっちゃった。かあちゃん（Aさんの妻）は家の裏のタネ（消雪池）に雪入れてて気付くの遅れた。

Aさんが（除雪を手伝っていた家から）カンジキつけたまま走って帰って、4月に娘を嫁に出す20万、タンスから取り出したんだ。かあちゃん（Aさんの妻）も結納の品とか取り出そうって入ろうとしたのを引きとめた。若い衆は雪玉、窓から投げこんでた。（なす術なく）みんなちょこんと座って見てたよ。夜には消えた。

このことは、消防車の往来、消火用水の取得に支障がある冬季は特に、火事を起こしてはならないという教訓になったという。加えて、二言目に挙げられた「家から出られるのが一番」については、昭和 60（1985）年、主人の入院により家を留守にして、雪の降り積もる中帰宅した際のエピソードが語られた。

1 月 19 日に帰って来た。（積雪と凍みつきで玄関の）戸が開かなくて。ひと月も留守にしていたんよ。家もタネも雪に埋れてた。⁽¹¹⁾ ゴンゾ履いて、テッテッテ〜って（家を掘り出して歩き回っていたら）隣の母ちゃん^{かあ}にからかわれて……「夜になっても風呂場見つかんねーぞ！」って。

風呂場と玄関が中門造の部分に設置されているので、そこを掘り出して屋内に入ろうと奮闘しているところを隣人にからかわれたことに対して、自分の家は自分で守らなくてはならない、と Y さんは強い意志を言葉にした。これら二つのエピソードは、Y さんの人生の中で強い印象を持って記憶されていることがうかがえた。そこから得られた「火の用心が一番。家から出られるのが一番」という教訓は、初対面の筆者に即答するほどの人生訓になっていたことがうかがえる。

V 信条と人生観

Y さんが、自身の暮らす地域の降雪について意識したのは高等科 2 年の時だという。そのことに関して、スキー選手として活躍してきたエピソードが挙げられた。その当時、女子はあまりスキーを買ってもらえないものだったが、祖父がお金を出してくれたという。

桑名川、馬場^{ばんば}のスキー屋、市川屋までゼニ 11 円握って。何度もポケット見いみいして（お金がポケットにあることを確認して、スキー道具を）買いに行った。大会で 1 等になった。女子 62 人、背の高い人から順に。10 人ずつ飛ぶ（スタートする）。（Y さんの出走順は）3 組だった。足のビンテグ（留め具を確認して）……股の間にストック挟んで、イーって、降りたんだ。

記憶も詳細に、興奮まじりに一気に話が続いた。さらに話題は富山県の笹津工場へ紡績の仕事に出たことに及んだ。

大東亜戦争の年、ひと冬だけ笹津工場行った。麦いっぱい入ったごはん、茶碗ちょうどに盛ってある。大根のスネッぽ（大根の端が入っているほどの粗末な食事だった）。スキーの選手だけ、（仕事終わって）夜練習の後、暖かい部屋で、おやつにうどん出た。

このように Y さんは、積雪が多い地域に暮らしていたためにスキーに⁽¹²⁾長けており、選手に選抜されて活躍し、さらに戦時中の工場勤務で食糧事情が厳しい中、スキー選手にだけ暖かい部屋でうどんが提供されたなど、良い思い出をしたエピソードが続いた。これらのスキーにまつわるエピソードは、幼少期の遊びの話や女子挺身隊として従事した話の流れから、細かな表現は異なるものの、声のトーン

ンも高く、興奮まじりで複数回語られ、スキー選手として活躍した自負がうかがえる。

冬季の家庭内生業について、Yさんが昭和22(1947)年に集落内で嫁いでからは、その後22年間にわたり和紙を製造・出荷し、義父の病を機にキノコ栽培・出荷に変更して16年続けた。昭和60年、主人の病気を機に家庭内での生業を辞め、Yさんはスキー場近くの民宿へ働きに出るようになった。近年は民宿への勤務も辞め、非降雪期に自宅用の野菜を作り、降雪期は自宅を守ることに専念している。畑仕事や冬季生業に関しては、夫婦ともに熱心に働きすぎて体を痛め、それぞれが手術したり入院したエピソードが散見された。例えば、紙すきに関して、「楮^{コウゾ}、雪にさらしたり、タネの中から拾い上げたり……アンカ腹に抱いてたから、冬終わる頃には腹焼けた。でもアンカ抱いてないと水ちびたいから。毎日、手真っ赤になったよ」という話や、キノコ栽培⁽¹⁴⁾に関して、「エノキはガラスの瓶(で重たい。その)コンテナ3段持って階段昇り降りした。肘痛めて手術。先生(医師)に働きすぎ言われた。親指しゃぶれるようになったら(肘が曲がるようになり、親指が口に届くようになったら)退院できるって言われて。毎朝肘、お湯につけて(リハビリに励んだ)。この家来て60年。いっぱい神様に食べさせてもらった」などのように、労働に関しての語りは総じて苦労に関することを淡々と語ったが、沢山働いたお陰で現在まで食べることに困らずに生きてこられたとして、神様への感謝を表明していた。

3月頃、日中に気温が上がり、日差しで融けた積雪表面が夜間に凍る「凍み渡り^し」の状態になると、Yさんは積雪表面が融け始める前の早朝、畑の積雪表面に灰を撒いて回り、融雪を早めて春の畑仕事を早く開始できるよう工夫している。4月、他の家々よりも早く農作業に取り掛かった畑を前に、Yさんは次のように話し始めた。

雪消えたところからアスパラとか(畑仕事が沢山ある)。他の家はまだ畑出てないで!(まだ畑に雪が残って地面が見えていないぞ!) 雪掘るのやだかったら、死ねばいいんだけど、死ぬのやだかったら、雪掘ったり、穴掘ったりしねーと。オレの人生だ。

一息おいてさらに、集落で一番立派なお墓を建てて先祖を祀っていること、浄土に生まれ変わるために、今を懸命に生きていることを語った。Yさんにとって生きていくためには、雪が多いなどと言って、かまけていられないということだった。8月に話を伺った際、Yさんは縁側でズクなし豆⁽¹⁵⁾の皮を剥きながら、「ズクがないとダメだ」と一生懸命に働くことが何より大切だとおっしゃった。「ズク」という方言は、Yさんの表現によると「ちゃかちゃか動き回ること」である。どんな状況であっても、気力をもって体を動かすことが来世への報いになるということであった。

近隣住民の中には、除雪作業は自宅が破損しない程度にし、畑の雪も自然に融けるのを待つ家庭もある。年金生活となったYさん夫婦には、わざわざ畑の積雪に対して手をかけずとも、積雪が溶けるまで待つという選択肢もある。それにもかかわらず、Yさんは他の家庭と比較して、一生懸命に働いてきたからこそ長年食べることに困らずに生きてこられたのだ、と神様に感謝を表明していた。Yさんにとって生きていくためには、雪の多さにかまけることなく、日々懸命に働くことが大切であるという人生観がうかがえた。

VI 雪国に生きる覚悟

話を伺う中で、Yさんは戦時中のことを何度も思い返し口にした。富山の笹津工場へ出稼ぎに行ったことや名古屋の潤滑油工場へ女子挺身隊⁽¹⁶⁾として出向いたこと、集落内で戦死した方や親戚の動向などが思い返されるままに語られた。その一端で、終戦の年は特に降雪が多く、祖父が5月6日に亡くなったが、ソリで焼き場へ運んだほどだと、Yさんの居住地は積雪量が多い地域だという話題に及んだ。ひと冬だけ静岡へ「みかん切り」の出稼ぎに行った時は晴天続きで驚いたという話を受けて、筆者は雪の少ない地域へ移り住みたいと思わなかったかうかがった。

わしら生きていかんと！ みんな農家に嫁に行きたい言うたよ。よそに出たって食糧難だ。ここで生まれたから、ここが一番いい。ここに嫁いだから、ここで一生暮らすんだってのになってる。……雪降らねーんだったら1年中働いてなきゃ。みかん終わったら麦踏んで……次々と。(一呼吸おいて) おらんちはタネ(消雪池)ねーと生きていかんね。とーちゃん(夫)とそう話したんだ。娘に「お金出すから、誰か冬ダネ掘ってくんねーか」って頼んだら、孫とその友達2人来て、2時間で掘ってった。たまげたー。(それぞれに) ビールと1万円渡したんだ。

Yさんはお金を出してでも、自分たちの力で生活できるように、冬ダネを整備することが欠かせないと訴えた。この年、Yさんの夫が体調を崩しており、屋根雪の落ちる位置に穴を掘り、通水して冬ダネを設けるという作業が進められずに困っていた。Yさんの娘に頼まれた孫と友人たちは、農作業用の重機「ユンボ」を持ち込み、冬ダネとなる位置を掘削して通水を手伝ったという。例年であれば夫と二人、丸一日かけて手作業で冬ダネを掘っていた。冬ダネを設ける位置は、屋根雪の落ちる位置であるが、母屋の縁側前で日当たりもよく、農作業に重宝する位置なので、非降雪期には埋め戻して作業場になっている。翌年も掘りやすいようにと、材木やタイヤを入れて埋めるなどの工夫を凝らしている。Yさんは、孫たちがあつという間に冬ダネを整備してくれた、と感激していた。

この地域の人々が長年、消雪池を整備してきた理由は、冬の盛りの積雪に備えるためである。毎年1月から2月にかけて、立て続けに雪が降り積もる日が何度かある。そのような雪のことをこの地域では「ホータイ雪⁽¹⁸⁾、バカ雪、ドカ雪」などと呼んでいる。体積としては多いが、パウダースノーの軽い雪質で除雪しやすい。しかし毎日に締まって硬くなる性質があるため、日数を空けずに除雪しないと手をつけられないほど硬くなる。降ってすぐに除雪しなかった積雪は、結果として春の雪解けを待つことになる。Yさん夫婦も「ホータイ雪⁽¹⁸⁾は悪い雪だ」と言って特に警戒しており、ホータイ雪の降った後、どの家庭も除雪作業に追われるような大変な状況の中で、親類に除雪に来てもらうことのないように、消雪池を整備して自分たちの力で除雪できるように努めているということだった。人力ではコントロールできない自然環境を前に、「雪」の特徴を理解し、この場所で生きていけるよう適応方法を模索してきたYさんは、これからも自力で生きていく意志を込めて「冬ダネ」を用意して積雪⁽¹⁹⁾に対応していくであろうことが推測できる。

また、静岡でのみかん切りのエピソードでは、みかん収穫が終わっても麦の根張りをよくするために麦踏みの作業に追われるなど、冬の間も仕事があり、休む間もなく作業が続くことへの不満が挙げ

られた。Yさんの話によると、冬季は積雪に対して備えさえしてあれば、雪の降らない日には、近所の人とお茶飲みをしたり、野沢温泉へ出かけたりすることができるのだという。⁽²⁰⁾ 除雪に対して要領を把握した現在では、雪が片付いていないのに遊びにいくと「後ろ指を刺され」てしまうが、一方で、人に迷惑をかけないように準備することで、余暇を楽しむことができる期間となっているという、雪国特有の生活リズムがうかがえる。近隣住民への聞き取りからも、雪の片づけさえ終わってればスキーなど余暇の時間を楽しめるということであり、余暇を設けられるように雪に備えをしておくという時間の使い方も地域に共有されてきた民俗知識の一つであるとうかがえた。

VII 他所^{よそ}との比較

再びKさんの事例より、積雪量の少ない地域との生活の違いについて検当する。Kさんの畑は山腹にあり、千曲川を挟んで向かいには野沢温泉村やそのスキー場、遠くは中野市方面の山々まで見渡せる。秋の終わりには「鍋倉山に三度雪が降ると、(集落にも降雪が)そろそろかな……」と、指標になる山に雪がかぶる様子を見て、家屋の雪囲いや野菜の収穫など冬支度を終わらせる目安にしているという。⁽²¹⁾ 畑の標高が高い分、春先の残雪量も多く、日当たりの悪い場所によっては5月まで雪が溶け残る。積雪の残る畑で4月に話を伺った際、呟くように「中野の方はいいやなぁ」と話が始まった。

雪は無い方がいいわなぁ。冬の間何か作れるし。雪はかまっても金にならんし。畑してられれば収入になるのに。雪囲いも。除雪も。200万出して除雪機買わなくても。家も柱も、もっと簡単にできたかな。スキーしたくなったら山登ればいいし。

Kさんは畑作業をしながら遠く中野市の方を見て、降雪量の少ない中野市と比較して、積雪量が多いこの地域で生活することに対する苦労が淡々と呟かれた。この日は小菊栽培の作業を行っていた。お盆やお彼岸に合わせて出荷できるよう、小菊の生育状況を見て、農薬や肥料を調整し、雑草を取る。特に4月のこの時期は、花のまとまり、葉の色の濃さ、病気にかからないようにすることに注力する。3月には、小菊の畑に積もった雪の表面に灰を撒いて雪解けを早め、出荷時期に小菊の丈が90～100 cmに成長するように工夫をした。3月の「凍み渡り」の時期、早朝には凍った積雪表面の上を歩き回れる状態になるので、小菊の成長を促したい畑には、雪の表面に灰を撒き、融雪を早める工夫をする。灰はJAで購入した黒い炭の粉で、灰を撒いていない畑とは融雪に30～50 cmの差が出るという。昔は籾殻を燃した灰や土を撒いたが、近年は籾殻を燃すこともなくなり、土は重たく労力がかかるため、JAの製品を購入している。小菊の丈を出荷時期に90～100 cmに育つように調整することで、80 cmの規格に切りそろえ、葉のボリュームを調整して出荷する。

話の流れの中で、もし雪が降らなかったら何をしているか伺ってみたところ、次のように返答があった。「花づくり、やってるわ。きっと。冬には冬なりの花があって～」と、スズランを栽培してみたいことや、ビニールハウスを設置して温室でイチゴを栽培してみたいなど、雪への呟きからは一転して、活き活きと返答があった。ビニールハウスは雪が降ると破損するために冬季は設置できないことなどを一通り話した後、最後に再び「雪は手かけても金にならん」と念を押した。小菊の栽培は、

Kさんが近年特に力を入れている商品作物の一つで、農業仲間の勧めで栽培を始め、JAのフラワーコンテストで最優秀賞を受賞した経験もある。農業仲間は、作物や農機具、除雪機に関しての情報交換、家族のことなど様々に話せる仲間である。この日は念を押すように「雪は手かけても金にならん」と繰り返し呟かれた。

Kさんは、自宅の除雪を積雪深に応じて息子と手分けして行う。スキー場への勤めを辞めた現在は、家族や家屋を守るための除雪に励んでいる。学校へ通う孫たちや、勤め先に向かう息子は降雪の有無に関係なく定時に登校・出社しなくてはならないので、降雪の度に朝、母屋から公道まで除雪し、屋根雪が溜まって家屋が破損しないよう、日々注意を払っていた。

どれだけ手をかけようとも、春になると消え去る雪を前に、Kさんは「雪は無い方がいいわなぁ。冬の間何か作れるし。雪はかまっても金にならんし。畑してられれば収入になるのに」と話していた。歴史学で聞き書きを取り入れてきた大門正克は、「聞き取り（口述資料）」をもとにした歴史認識について、「今を生きる人間が過去を問う」ものである（大門2012：6）と考察している。Kさんはスキー場の開設により、家族が離れ離れにならなくて良い状況に不満はない様子であった。積雪の少ない地域と比較すると積雪量が多い地域は制限が多く、農業ができない故に出稼ぎに出たり、現金収入を得られるような家内生産に取り組んだりするなどの制限を受けてきた。一家の稼ぎ頭が自身から息子へと代替わりしたことから、小菊や農作物が高値で売れるよう工夫することへ興味関心が移っていた。そのため、雪への心配が少なくなった現在では、積雪による制約の大きかった以前と比べて、現在は十分に暮らしていけるとはいえ、豪雪地帯対策特別措置法などの法整備の原動力になったように、やはり「雪はない方が良い」と「雪」への認識が変化していく様子が明らかになった。

おわりに

KさんとYさんのライフ・ヒストリーから、次の二点について考察する。一点目は集落の伝承母体の体现者として「雪」に対処してきた民俗知識についてである。飯山市の山間部という降積雪量の多い地域で暮らしていくために伝えられてきた知恵として、雪の特性を知り、適応しながら生活を営んできた民俗知識の具体的な様相を、二人のライフ・ヒストリーから見いだすことができた。民俗知識の中でも、人々が自然への対峙方法を取得したものに関する「自然知」の研究成果がこれまで多様に蓄積されてきた。篠原徹は、「自然知とは文字知に対する概念であって、文字を媒介にして獲得される知識ではなく自然と対峙し観察して獲得される知識の総体」であり、自然を相手に生業を行う際には「自然知という民俗的知識が技能を支えている」（篠原1995：1）と指摘している。このような自然知は、鍋倉山など周囲の山に三度雪が降るとその頃には集落でも雪が積もるので冬支度を終わらせる目安としていること、降雪の中でも特に厄介なホータイ雪に対処するために「タネ」や「冬ダネ」を整備しておくこと、春の農作業を早く始められるように「凍み渡り」の時に灰を撒いて雪解けを早めることなどが、自然に対峙して獲得・共有されてきた知恵であり、降積雪量の多い地域で生き抜くための技能であると考えられる。二人の口述資料をライフ・ヒストリーとして文字化することで、飯山市の山間部で「雪」に対処しながら暮らしてきた人々の具体的な民俗知識の様相を記録し、伝えることができると考える。

一点目では話者を伝承母体の体現者として捉えたが、二点目は個人の主観から、人生という時間軸における「雪」認識について考察する。Kさんの例からは、「雪」の認識はその時々状況や生業の影響を受けて変化していることが明らかになった。特にスキー場の開設により出稼ぎに行かずとも現金を稼げるようになった経験から、「雪は苦でなくなった」という。その後、「家族が離れ離れにならなくて良い」状況に不満はないものの、小菊など農作物が高値で売れるよう工夫することへ興味関心が移ったために、やはり他所と比較すると、積雪による制限が少ないこと、雪への対策にお金をかけなくてよいなどのことから、積雪量の少ない地域をうらやましく思う、というように再び「雪」への認識は遷移していた。安室知は自然観について、「生活者の目（感性）を通したとき地域の自然は決して図鑑通りではなく、「地域における生活体験を通して個人に固有のものとして会得され」、「生業や衣食住、信仰といった民俗的な営為を通して自然は意識される」（安室 2019：124-125）と指摘し、環境としての自然は皆に等しく存在するが、それをどのように感じ、どのように克服または利用するのかという点は、地域や時代、おのおの状況や生業によって異なってくると著しているように、Kさんの場合も生業の変化に応じた「雪」認識の変化が認められた。

Yさんに関しては、人の力ではコントロールできない「雪」に対して、毎年雪が降り積もることを想定して食糧や燃料を確保し、家屋を守る対策を講じておき、人の世話にならなくて済むようにしておくというように、この地で生活していくために「雪」は対策の必要なもの、と人生を通して「雪」への認識は一貫していた。この点に関してKさんの場合には、先祖から受け継いだ土地を守り、家族との生活のため、いかに稼ぐかに焦点があり、他所との比較から「雪」への認識がその時々状況に応じて変化していたが、Yさんの場合には、懸命に働いて生きるという信条のために、「雪」の多寡は焦点になりにくかったと考えられる。

また、Yさんのエピソードからは、これからも冬になると食糧を確保し、家屋を守って人の世話にならずに生きていこうという強い意志が読み取れた。さらに踏み込むと、これからも冬支度をし、その一貫として「冬ダネ」などを整備し続けるだろうという意志がうかがえた。このように、個別特性の強いエピソードからは、民俗知識が「どのように伝承してきたか」、「どうしてこのように行動するのか」という過去・現在を知るだけでなく、「これからどうするか」という未来までも推測することができるのではないだろうか。本稿では、飯山市に長年暮らしてきたお二人の事例から考察したが、他の人々や地域、時代について検証するためにも、調査を続けたい。

付記

本稿は、2009年首都大学東京に提出した修士論文の一部を大幅に修正した物であり、2020年日本オーラル・ヒストリー学会第18回大会（JOHA18）で発表し、助言をいただきました。

調査にあたっては、Kさん、Yさん、並びにご家族の皆様に長年にわたり大変お世話になりました。この場を借りて、御礼申し上げます。

註

- (1) 秋山郷とは、新潟県中魚沼郡津南町の見玉・穴藤・逆巻・清水川原・結束・見倉・前倉・大赤沢、及び長野県下水内郡栄村の小赤沢・屋敷・上ノ原・和山・切明、以上に加えて、戦後に開拓された五宝木、上ノ原開拓村の総称である。
- (2) 「ライフヒストリー」と「ライフ・ヒストリー」の表記については江頭(2007)に詳しく、本稿では『新版 民俗調査ハンドブック』にならい、「ライフ・ヒストリー」に統一する。
- (3) Kさんへの聞き取り調査日は以下の10回である。
2007年12/3、2008年2/13、2/21、2/27、3/19、4/11、6/26、8/5、10/11、11/18。
- (4) Yさんへの聞き取り調査は以下の12回である。
2008年1/14、2/16、2/17、2/28、3/20、4/10、6/27、8/5、8/26、9/12、11/17、2009年3/2。
- (5) 「実際には一里二尺に相当する」(飯山市誌 自然環境編1991:119)と言われるほど、山間部へ行くにつれて積雪量が多くなると記されている。
- (6) 藁叩きや子守りなど、「子どもたちは学校から一旦家に帰ると、一家の労働力の要因としてよく働いていた」。小学校の四・五年生くらいの農繁期には「トウド」(手伝い)のために、欠席児童が多くなった(飯水教育委員会1988:98)など、子どもも一家の重要な働き手であった。
- (7) 一般に「カネトリ仕事」と呼ばれる。「昭和二十年(戦後)になって化学製品や電気製品及び石油などが出回るようになり、それらの製品におされて炭焼き・ワラ細工・和紙作りなどの仕事をする人が減少してきた。それに代わって、仕事をよそに求めて出稼ぎに出るようになった。」「静岡県へのミカンとり、関東方面の土建関係の仕事、中京方面の大垣市や豊橋市の紡績工場」などへ行っていたが、「昭和四十年代になると、スキー場などの観光開発によって志賀高原や野沢温泉・戸狩など近隣の民宿やホテルへ働きに出るようになった。」(飯水教育会1988:71)など、現金を稼ぐために、製造物や労働場所は変化していった。
- (8) 『村人たちがもどってきた! 信濃平スキー場・村起こし物語』(足立1992)には、男性たちが出稼ぎに出ている間、残された家族が火事に遭うなどの不幸をきっかけに、出稼ぎにいかなくてもやっていけるようにと、住民たちで観光協会を設立するなどして奮闘した様子が記されている。
- (9) 当該地域では、積雪が屋根の高さを越えるため、屋根雪の除雪など家を掘り出す作業のことを「雪を掘る」と表現している。
- (10) 昭和35年、太田スキー場として開業(飯山市誌 歴史編(下)1995:594)し、2013年からは戸狩温泉スキー場株式会社(未上場)が、「戸狩温泉スキー場」として三つのゲレンデに9本のリフトを設置して運営している。証言は平成元年頃の記憶だという。
- (11) 藁で編んだ靴で、ゴンゾはスンペよりも丈が長く、長靴に近い形をしている(飯水教育会1988:78)。
- (12) 飯山市では、「軍隊や産業界でスキー術が活用され、学校でも冬期間の体力づくりにスキー教育は注目され」た。「学校の体育の授業にスキーが導入され」、「昭和に入って、ますます普及した」(飯山市誌 歴史編(下)1995:456)など、スキー技術の向上が盛んに推奨された。
- (13) 紙すきを冬季生業としていた時には、楮を水にさらす作業工程のために、玄関横の小さい冬ダネを1mほど掘り下げていたという。紙すきをしなくなってからは、深さを必要としなくなったので、以前と同じく冬ダネは30cmほどの深さで用意している。飯山市において内山紙製造は、有力な地場産業として明治期から急速に発達した(飯山市誌編纂専門委員会編1995:97)という。
- (14) 飯山市でキノコの人工栽培は、昭和32(1957)年に「冬季の貴重な換金作物、出稼ぎ対策として」導入され、技術改良と共に生産者も増加した(飯山市誌編纂専門委員会編1991:450)。
- (15) 『『ズクなし』は氣力がなく無精になることをさし、ツルを出すズクもないササゲ豆は『ズクなし豆』と呼ばれている」(向山・市川1970:194)。
- (16) 戦時教育体制の中で軍要員と軍需生産要員の充足に応じるため、学徒の動員体制が次第に進められ、昭和19(1944)年「学徒勤労令」、「女子挺身隊勤労令」が公布された(文部科学省HP)。
- (17) JR 飯山線・森宮野原駅には、1945年2月12日に積雪が7m85cmを記録したという標柱が建立され

- ている。
- (18) 例えば「ホーテキ：降ったばかりのふわふわした軽い雪」（青木 1976：1）や、「ほーとー雪：新潟県十日町市や津南町では、雪粒のごく細かな乾いた雪をほーとー雪といった。気温が低い時に降り、握っても固まらないサラサラした雪である」（稲 2018：214）など、上空が低温の時に降る軽い雪質で、一度にまとまった量が降り積もる。「ユキ」の発音に関して、この地域では「エチ」「エギ」へ変化する傾向がある（国立国語研究所 1985）。
- (19) 結果的に冬ダネを整備したのは、この年が最後となった。主人の入院のために家を空けている間、積雪により母屋が倒壊し、転居を余儀なくされたためである。家の裏側（横井戸のある斜面側）のタネに水をかけていなかったために、斜面からの積雪が母屋の壁を押す形で倒壊した。
- (20) 聞き取りをした前年は特に降雪量が少なく、Yさんは「夏みたいだった！」と話していた。近所の人と頻繁にお茶飲みをしたり、公民館で折り紙を楽しんだりしたという。
- (21) 「里の初雪は山に三度目の雪と言いつたえられている」（稲 2014：13）など、近くの山頂に降雪が三度あった頃が、集落での降雪のタイミングだとする伝承が各地に散見される。

引用文献

- 青木千代吉 1976『下水内の方言』飯水教育会
- 足立寅夫編著 1992『村人たちがもどってきた！ 信濃平スキー場・村起こし物語』章文館
- 有馬絵美子 2023a「『雪』と折り合いをつける暮らし——秋山郷歳時記——」『信濃』75（1）信濃史学会
- 有馬絵美子 2023b「除雪に関する民俗知識の継承——消雪池と克雪住宅の変遷から——」『非文字資料研究』（26）非文字資料研究センター
- 有馬（中山）絵美子 2009「多雪環境に生きる——融雪池『タネ』を活用した雪国の暮らし」『地理』54：54-63
- 飯山市誌編纂専門委員会編 1991『飯山市誌 自然環境編』飯山市
- 飯山市誌編纂専門委員会編 1995『飯山市誌 歴史編（下）』飯山市
- 稲雄次 2014「雪占い」『北方風土』（67）イズミヤ出版
- 稲雄次 2018『雪のことば辞典』柊風舎
- 岩本通弥 2020「ナラティブと主観性の復権——民俗学からの問い」岩本通弥編、『方法としての〈語り〉民俗学をこえて』：1-37 ミネルヴァ書房
- 江頭説子 2007「社会学とオーラル・ヒストリー：ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』法政大学大原社会問題研究所
- 大門正克 2012「人に話を聞くということは、どういうことなのだろうか——歴史学における現場から——」『現代民俗学』（4）現代民俗学会
- 柏原辰吉 1993『北海道の自然 雪を知る』北海道新聞社
- 菊池武雄 1968『自分たちで生命を守った村』岩波書店
- 呉羽正昭 1999「日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容」『日本生態学会誌』49：269-275
- 国土交通省 HP 2022「豪雪地帯対策の推進」（https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chisei/crd_chisei_tk_000010.html）[2023-03-28]
- 国立国語研究所 1985「第 260 図 ゆき（雪）」『日本言語地図 第 6 集』国立国語研究所報告
- 桜井厚 2013「オーラルティの復権——『口述の生活史』前後——」『現代民俗学研究』（5）現代民俗学会
- 佐藤国雄 2001『雪国大全』恒文社
- 篠原徹 1995『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 妻有の婦人教育を考える集団編 1976『豪雪と過疎と——新潟県十日町周辺の主婦の生活記録』未来社
- 中込睦子 1987「Ⅲ 民俗調査の方法と基礎知識」上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田登編『新版 民俗調査ハンドブック』吉川弘文館

- 中野紀和 2003「民俗学におけるライフヒストリーの課題と意義——祭礼研究との関連から」『日本民俗学』234：1-30 日本民俗学会
- 中野卓 1977『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』御茶の水書房
- 飯水教育会 1988『鍋倉山麓 岡山上段地域の民俗』飯水教育会
- 向山雅重・市川健夫 1970『信濃ことわざ歳時期』信濃路
- 文部科学省 HP「三 戦時教育体制の進行」『学制百年史』（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317693.htm）[2023-6-20]
- 安室知 2019「民俗学は「自然」をどう描いてきたか、また描いてゆくのか」『日本民俗学』300：123-134 日本民俗学会
- 和歌森太郎 1970『新版日本民俗学』清水弘文堂
- 渡邊欣雄 2008「沖縄の暦と年中行事」『アジア遊学』106